

Case
3

おぎくぼ シャレール荻窪

東京・杉並区



シャレール荻窪の環境を
満喫する正木京子さん
と5歳の伶旺(れお)くん



都心の暑さを忘れ 風の吹き抜ける団地に暮らす

新宿から電車でわずか十数分、杉並区荻窪に2011年、「シャレール荻窪」が誕生した。

荻窪駅の南にあった「荻窪団地」が、半世紀を経て生まれ変わった。

環境に配慮した空間に、涼しい風が吹き抜け、コゲラなどの野鳥や昆虫が遊ぶ。

そこには都心の暑さを忘れるエコな暮らしがある。

写真=★的野弘路、★田中 昌 取材・文=谷内信彦

★



暮らしに優しい環境配慮満載の団地



善福寺川沿いに設けられたクラインガルテンではさまざまな野菜がすくすく育つ。雨水を利用できる手押しポンプも備え付けられている



風車と太陽光発電パネルによる電気を街灯などに活用。駐車場を建物1階に入れて、敷地内のコンクリートで覆われた面積を減らしたり、壁面緑化や屋上緑化を取り入れたりすることでヒートアイランド現象の軽減に貢献している

緑の中、虫を追い掛ける伶旺くん。環境に配慮したシャレール荻窪は子育てに最適だ



キツツキの仲間であるコゲラやアゲハチョウを見ることが出来る。雨水を利用した小鳥の水浴び場も用意した



あつて、完成とともに入居した。「駅前には建物や道路の照り返しのせいか暑く感じる。こは、緑が多くて涼しい風が流れるので駅前より2〜3℃は低い感じですね」。

コゲラやアゲハが舞うまち

さらに、シャレール荻窪では、建物の間を流れる風を住戸内に積極的に取り込むよう間取りなども工夫した。玄関側に窓を設けたり、間仕切りも引き戸にしたりすることで、バルコニー側と玄関側の間に風が流れる。岩田さんも、室内を風がすつと行き渡るのを感じながら暮らしているという。

風がゆつたりと動いていて、優しい感じがします」と話すのは、秋葉原からシャレール荻窪に引っ越してきた正木京子さん。

正木さんは敷地内のクラインガルテン(貸し菜園)を借り受け、花や野菜作りに挑戦している。「忙しいのであまりきちんと手入れはできませんが、どうにか育つものですね。水をやるために階下に降りて畑に向かうとき、ふと頬に風が当たる、そんなことがうれしく感じます」。

秋葉原の利便性は捨てがたかったものの、自然が少ないと感じ、子どもの将来を考えて引っ越しを決めた正木さん。シャレール荻窪には、環境保全の指標となるキツツキの仲間のコゲラが飛来し、アゲハチョウが舞う。都会では珍しい生物も目にする事ができる自然がある。「子どもたちも最初は虫を怖がっていましたが、今では追い掛け回すほど、すっかりたくましくなりました」と笑顔で話す。

シャレール荻窪では自然にあふれた環境の中で、風という恵みを受けて快適に過ごすエコな暮らしが実現している。



敷地を東西に貫く通路は、風の通り道であると同時に、大きな木が植えられて木陰で涼める場所になっている。夏の日差しの中でも、子どもと安心して遊べる場所だ



敷地の横を流れる善福寺川の涼しい風を取り入れている

配置計画を立案する際、風洞実験をして風の流れを確認した



涼しい風を感じて暮らせる団地

風が通り抜けるように2階の高さまで通路を広げた建物。風を感じながら会話をを楽しむ橋本・前自治会長(左)と岩田・現自治会長(右)

JR中央線の荻窪駅から徒歩13分、「シャレール荻窪」の、すぐ脇には善福寺川が流れ、敷地の南北に大きな公園や緑地がある。敷地内を涼やかに渡る風が自慢の一つ。「夏でもほとんどエアコンは使わないわね」と、ほほ笑むのは前自治会長の橋本悦子さん。「窓を開けるだけで室内の空気がそよぐ。自然の扇風機みたいなもの」と笑う。

シャレール荻窪は、1958(昭和33)年に日本住宅公団(現UR都市機構)が建設した荻窪団地を、2011年に建替えて誕生した。1965年に荻窪団地に入居した橋本さんは自治会長を12年務め、建替えにも深く関わった。UR都市機構では団地内や近隣の住人を参加者とするワークショップを20回以上開催して、団地建替えの課題を議論した。その話し合いの輪の中には常に橋本さんの姿があった。

紀の間、私たちが育んだ自然を継承するプランになりました」

もともと荻窪団地には善福寺川からの涼風が流れ込み、夏もかなり涼しく過ごすことができた。UR都市機構は建替えに当たっても、その自然の恵みを引き継げるようプランを検討した。風の流れを実測調査したり、八王子の技術研究所で縮尺250分の1の模型を作成し、住棟の並べ方や間隔を変えては風洞実験を繰り返した。

その結果、敷地南側からは善福寺川緑地からの涼風、西側からは善福寺川からの川風を取り込む風の通り道を設けるプランができた。配置だけでなく建物も風通しに配慮。建物を貫く通路を2階の高さまで開いた天井の高い構造にすることで、風をさえぎらないように工夫した。こうして配慮で隅々にまで風が通る団地が誕生した。

「たった15分ほどの距離なのに、駅前とは涼しさが違うね」と語るのは、2年前に隣の阿佐ヶ谷から移ってきた現自治会長の岩田安順さん。以前から荻窪団地一帯の自然環境を気に入っていたことも